

ギフチヨウの採集

一八八三(明治一六)年、靖は郡上郡祖師野(現下呂市金山町)で珍しい蝶を採集する。アゲハチョウに似た小形のもので、黒地に黄色の虎斑模様がくつきりしていた。今まで見たことがない種類のものなので、新種ではないかと思い、師事する石川千代松に鑑定を依頼し、当時の新種と確定され、この蝶をギフチヨウと命名した。この年、岐阜県華陽学校助教諭試補の職に就いていた。

その後、しづらギフチヨウを採集することができず、生態

の研究を進めることができなかつたが、一年ほど過ぎた頃、霞間ヶ渓(揖斐郡池田町)でギフチヨウを採集することができた。しかし、食性や生態の解明には至らず、靖は一家の人々を総動員し、懸賞金をかけてまで、その解明を試みた。すると、助手の梅吉(後に女婿となり靖の跡を継ぐ)が谷汲山の奥地でウスバサイシンの葉に卵を産み付けようとしたりといふを発見、採集したことにより、幼虫がウスバサイシンの葉を食草とすることが明らかとなり、賞金は梅吉のものとなつた。さうに研究を進め、成長過程や成虫は中部地方では三月末頃から

四月中頃までの短い期間しか姿を現さないとなど、その生態の解明に結びついた。

この頃の靖が研究に打ち込む姿の「うかがえるヒーロー」がある。靖は金華山の虫を採集するため、眞間木に蜜をぬり夜間に明かりをつけ、木に集まつた虫を捕集する作業を続けていた。夜な夜な金華山から見える明かりに、これは天狗が灯す明かりではないか、との噂が広がり、警察が山に天狗退治に出かけるほどの騒動になつたといつものである。

一八八六年一一月より翌年四月まで、帝国大学へ半年間入學し、その後、旧制中学校、尋常小学校で教鞭をとり、一八八八年には尋常師範学校及び中学校助教心得となる。靖は県下各地で講話を行い、実物標本や幻灯を用いて害虫駆除などに関する啓蒙活動をしつづけた。

農業害虫の駆除・予防指導

一八九一（明治二十四）年一〇月一八日、濃尾地震が発生した。岐阜県はもとより、近隣地域にも大きな被害が及んだ。この地震により、靖の標本格納庫は倒壊し、収集してきた標本はほとんどご損傷するといつ被害に見舞われている。その後も教職の傍ら講演活動を行っていたが、一八九六年に職を辞し、岐阜市京町に私立名和昆虫研究所（以降、研究所と表記）を設立する。

研究所の建物は、岐阜県農会から提供を受け、門を入って右側が農会の事務所、左側が研究所となっていた。研究所内には標本陳列室、研究室、養虫室が設置されていた。事業内容は、①昆虫の採集及び飼育、②図書の出版、③講習及び講話、④昆虫標本の保存及び展示、の四つを柱としている。

研究所を設立した翌年、ウンカが全国的に大発生して凶作となつたことから、岐阜県下をまわり害虫駆除の指導を行つた。一八九七年から始めた全国害虫駆除講習会は一九二三（大正一一）年迄二六回開催され、靖は害虫講話を担当していた。また、害虫駆除・予防から基礎昆虫学、学者の論文などを一般

の人々にも読みやすい文章で解説し、鮮明な図版を掲載した雑誌『昆虫世界』を発刊している。こうした靖の功績が評価され、農商務大臣より表彰を受け、一九〇一年には藍綬褒章を授与されている。一九〇四年、岐阜市からの要請があり、岐阜県農会や岐阜市有志者から建物・寄付金の援助を受け、研究所は岐阜公園（現岐阜市大宮町）の中へ移転した。

この頃までに、岐阜県から、所長へ害虫駆除調査員委託の手当金支給や研究所員の出張調査費の補助など公的資金を得ていたが、多額の運営資金が必要であり、研究所を支援しようと、一九〇六年に名和昆虫研究所維持会が設立された。これは、総裁に貴族院議員田中芳雄、副総裁に岐阜県知事薄定吉が就任し、一五〇〇円余の寄付を集めたといつ。翌年、大阪朝日新聞社による寄付金募集で集まった五〇〇〇円で耐火煉瓦造標本室（記念昆虫館）が建つた。こゝから、各地で行つた講演や啓蒙活動を通して、名和昆虫研究所の果たしていく役割が広く人々に認知されていたことがうかがえる。



害虫図解「第弐拾弐 モンシロテフ 油菜」
大垣市教育委員会蔵



害虫図解「第壹 エダシヤクトリ 桑樹」
大垣市教育委員会蔵



岐阜公園内に移転した名和昆虫研究所『岐阜県写真帖』より(国立国会図書館ウェブサイトより転載)

名和昆虫工芸部の立ち上げ

公的資金や寄付などを得ていたが、運営資金は不足しがちであったため、靖は名和昆虫工芸部を立ち上げた。『大日本養蜂家名鑑』に載せられた工芸部の広告をみると、「蝶蛾鱗粉転写」^{わめたかがりんぶんてんしゃ}加工、昆虫工芸品制作、昆虫標本制作、昆虫図書出版販売、昆虫に関する一切の事項、養蜂に関する一切の事項を取り扱い項目に挙げてある。この中で人気を博したのが「蝶蛾鱗粉転写標本」である。これは、一八世紀にフランスで実践された手法を改良したもので、蝶や蛾の羽の鱗粉を糊を使って直接移し取り、胴体部分は精細に描いて完成させる。紙以外の素材にも転写することができる。蝶蛾鱗粉転写標本だけではなく、蝶蛾鱗粉転写葉書、陶器や木材、金属、布帛、ガラスなどに転写した工芸品を制作し、販売をしていく。

名和工芸部による蝶蛾鱗粉転写標本や工芸品は、一般に販売されたが、その製品の美しさから天皇家や皇族への献納品として納められてくる。『地方経営小鑑』(一〇九)では「名和靖の発明せる蝶蛾鱗粉転写」と題して、一九〇九(明治四二)年九月一七日の皇太子行啓^{おとおしへ}の際に、一双の屏風^{だいふう}を台覧^{だいれん}に供したことを紹介する記事がある。

(前略)「賞感を賜りし屏風一枚あり、實に此転写をして製せられしものに係り、右方は蝶を以て岐阜の金華山に象り、左方は蛾を以て同山の麓に流るゝ長良川に象りたるものなり。此の如くにして蝶が昼間に出て、概ね高く飛び、蛾が夜間に出て、概ね低く飛びことを知らしむるに便したるは、以て其の用意如何を推す。とあり、製品には屏風のような大作も作られ、意匠が凝らされていったようだ。他に、梨本宮^{なしありのみや}、閑院宮^{かんいのみや}、東久邇宮^{ひがしくにのみや}などの皇族が名和昆虫所を訪問しており、その際には蝶蛾鱗粉標本や工芸品が献納された。



『大日本養蜂家名鑑』に載せられた広告
(国立国会図書館ウェブサイトより転載)

白蟻被害への取り組み

一九一一（明治四四）年、私立名和昆虫研究所は財団法人となつた。これ以降、岐阜県、岐阜市に加え、国からの助成金などを受けていたが、一九一五（大正四）年には、研究所は常に資力窮乏の状態であるとして、研究所運営の基本基金一〇万円を一般に呼びかけ、募集している。

一九一七年からは、白蟻被害への対応にも取り組んでいる。

『濃飛偉人伝』によれば、「近年古建築等に白蟻の被害甚しきを発見し、大正六年四月より歴代九十帝陵を始め、各地神社仏閣約六百余箇所を巡回して、白蟻調査に従事したる外、各種団体等の依頼に応じ、全国保護建造物等に於ける白蟻の駆除に努め、其の効果を挙げしもの尠からず。」とし、各地の要望に応えて実地指導を行い、鉄道線路や建造物に対する白蟻予防駆除の調査にあたり、功績を挙げたとする。一九一八年に開館した研究所の付属施設、名和昆虫博物館は建築家武田五一の設計で、建物の一階を支える三本の巨木丸柱は、白蟻被害にあつた奈良唐招提寺金堂と講堂の解体修理の際取り替えた古材をもじり受け、再利用したものであるといつ。

靖は、「昆虫翁」と人から称されてきたが、頭髪も白くなり、白蟻被害へ取り組みをしていることから、一九二二年の年賀状に「白蟻翁」と改名すると記述したといつ。この年の八月、大分県別府、山口県瀧部に出張した帰途に倒れ、帰岐して療養に努めたが、全快には到らず、一九二六年八月三〇日にその生涯を閉じた。

一九二三年、一月一八日付で藍綬褒章飾版が下賜されるが、官報には表彰の理由が次のように記載されている。

夙に昆虫研究所ヲ設立シ、後財団法人ニ組織フ改メ、孜孜トシテ昆虫ノ研究ニ力ヲ竭シ、殊ニ害虫防除ノ為各地ヲ視察シテ指導獎励シ、能ク其慘害ヲ除ク等洵ニ公衆ノ利益ヲ興シ、成績愈々著名ナリトス、依テ褒章条例第三条ニ拠リ、曾ニ授与セシ藍綬褒章附スヘキ飾版一箇ヲ賜ヒ、再ヒ其善行ヲ表彰セラル
（読点筆者挿入）

靖の築いた昆虫研究の軌跡は、その後継者により、名和昆虫博物館に受け継がれていく。